



Title	＜翻訳＞アルムファッダリーヤート試訳（I）：タ アッバタ・シャッラン
Author(s)	池田， 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2009, 7, p. 23-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105891
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムファッダリーヤート試訳 (I)

——タアッバタ・シャッラン——

池田 修*

1. المفضليات al-Mufaḍḍaliyāt¹⁾

Lyall によるものは أبو مُحَمَّد القاسم الأنباري 'Abū Muḥammad al-Qāsim al-'Anbārī (d. h. 304) による解説書を校訂したもので、もともと信頼されている。これは المفضل al-Mufaḍḍal から直接学んだとされる عامر بن عمران أبو عكرمة 'Āmir b. 'Imrān 'Abū 'Ikrima および أبو عبد الله محمد بن الأعرابي 'Abū 'Abd 'Allāh Muḥammad b. al-'A'rābī (d. h. 230-231, al-Mufaḍḍal の継子) の権威によるもので、126 編の詩が載せられている。Lyall 校訂本には、このほかに他の写本から4編の詩を加え130編の詩集としている。登場する詩人は67人で、うちジャーヒリーア詩人は47名、مُحَضَّرَم Mukḥaḍḍram 詩人20名となっている。前者にはユダヤ教徒1名(名前不詳)およびキリスト教徒2名が含まれている。

アルムファッダリーヤートと言う信頼できる詩集のみしか伝えられなかったとしても、これだけでジャーヒリーア詩の伝統を詳細に記述できる²⁾。この詩集から我々はジャーヒリーア時代のアラブの生活の諸相、部族間の相互関係、闘争などに加えて、ラフム朝やガッサーン朝の王家の様子などを伺うことが出来る。この詩集には今日では使用されなくなった古語が多く用いられており、また、地理的記述も多く、訳出するのは容易でないと感じている。

2. المفضل الضبي al-Mufaḍḍal al-Ḍabbī (d. h. 163/780)

名のごとく彼は ضَبَّة Ḍabba 族の一員で、多分8世紀はじめに خراسان ホラサーンで生まれただろう。多くのムスリム学者が非アラブの改宗者でマワーリーであったのに対して、彼は純粋なアラブの名家 as-Sid 家の出身であった。彼の父 Muḥammad b. Ya'la は H. 30-90年、イランの北東部ホラサーンでの征服戦でタミーム族との連合軍の指揮をとった。この宿営地で詩人は生まれたらしいが、正確な日付は不明である。彼の祖父 Ya'ala はウマイヤ朝の將軍 الحجاج al-Ḥajjāj アルハッジャージュによ

* 四天王寺大学 客員教授

1) C.J. Lyall (ed), *The Mufaḍḍaliyāt*, Oxford, 1918. A. A. Shākir and M. 'A. Hārūn (eds), *al-Mufaḍḍaliyyāt*, Cairo, 1942, 3rd edn. 1964. A. M. al-Bijāwī (ed), *Sharḥ al-Mufaḍḍaliyāt* (with commentary of al-Tibrizī), Cairo, 1977.

2) Shawqī Ḍayf, *al-'Adab al-Jāhili*, p. 177.

と言うのは、生活していく資力のない貧者をさし、泥棒を生業にしている者をさすが、ジャーヒリーア時代の *ṣuʿlūk* 詩人は襲撃や追いはぎを専らにする者達のことで、次の3種に分類されている³⁾。

- (1) 犯罪行為が多く、部族から追放された者。(例: Ḥājjiz al-ʿAzdi, Qays b. al-Ḥaddādiya, ʿAbū al-Ṭamḥān al-Qaynī)
- (2) アラブの男性とエチオピア系の女性との間に生まれた黒人で、父が認知しなかった者。(例: السُّلَيْكُ بْنُ السُّلَيْكَةِ al-Sulayk b. al-Sulaka, Taʿabbata Ṣharraṇ, الشَّنْفَرَى al-Shanfarā) 彼らは肌が黒かったため *أَغْرِبَةُ الْعَرَبِ* ʿaghribat al-ʿarab (アラブのカラス) と呼ばれている。
- (3) 前記(1), (2)ではなく、襲撃や追いはぎを専ら行った者。(例: عُرْوَةُ بْنُ الْوَرْدِ ʿUrwa b. al-Ward al-ʿAbsī のような個人もいれば, هَذَيْلُ Hudhayl や فهم Fahm のように部族全体がこれを生業としている例もある)

ジャーヒリーア時代の理想的倫理は *مُرُوَّة* murūwa (男気) にあるとされているが、その内容には、部族や一門への *وَفَاءٌ* wafāʾ (忠誠)、貧者や弱者への *كَرَمٌ* karam (気前よさ)、戦闘など困難な事態における *صَبْرٌ* ṣabr (忍耐)、自己への *صِدْقٌ* ṣidq (誠実)、自己の *عِرْضٌ* ʿird (尊厳) を守る、善行を好み、悪行を嫌う、他の権威をこばむ、などとされている。このような倫理的枠組みから外れた者は、他人のものを奪うほか部族社会では生きていけない。ṣaʿālīk たちはそれゆえ、*دُؤْبَانُ الْعَرَبِ* dhuʿbān al-ʿarab (アラブのオオカミ) とも言われた。この種の詩人は、部族よりも自己をほこる。貧困や飢えに対する忍耐力、危険に出会おうと持ち前の走力を利して逃げる、孤独を癒すためにオオカミなどの野獣やジンと対話する、などの特徴を有する。

Taʿabbata Ṣharraṇ はメッカと紅海との間に広がる *تِهَامَةُ* Tihāma を拠点としていた Fahm 族の有名な戦士であった。北側には Hudhayl、南側には *بَجِيلَةُ* Bajīla, *خَثْعَمٌ* Khathʿam, *الْأَزْدُ* al-ʿAzd, *مُرَادٌ* Murād などの南アラブ系の部族が住んでいた。彼の属する Fahm 族は *مَعَدَّة* Maʿadd, 北アラブ系の部族で南北の諸部族と紛争が絶えなかった。彼がいつ頃の人であったかを正確に伝える資料はないが、歌の書の彼の項に登場する人物等から推定して6世紀前半と推定されている。しかし、彼の詩にはイスラーム的要素は何えず、多神教時代の精神のみが反映されている。彼はアラブ人の父とエチオピア系の母の子とされているが、そうではなく Fahm 族の自由人 *أُمَيْمَةُ* ʿUmayma が母であった、という言い伝えもある。

彼が「腋の下に災いを抱えた男」という奇妙なあだ名で呼ばれたのについても、抱えていたのは刀だとか、へびだったとか、*غُولٌ* ghūl (食人鬼) であったとかいくつかの言い伝えがあるが、いずれも、信頼できない。おそらく、犯罪行為の常習者であった彼に部族がつけたあだ名かと思える。

3) Shawqī Dayf, *al-ʿAṣr al-Jāhili*, p.375

4. Ta'abbaṭa Sharran の詩

彼の詩は、歌の書の彼の項にいくつか載っているほか、الحماسة al-Ḥamāsa 詩集に3編、الأصمعيات al-Aṣma'īyāt に1編組み込まれている。彼を特に有名にしているのは、al-Ḥamāsa 詩集に載っている26行からなる لامِيَّة lāmīya の詩、いわゆる、復讐の詩であるが、これは古来、خَلْف الأَحْمَر Khalaf al-Aḥmar による偽作の疑いがかけられている。

ここに訳出した彼の詩は、عَمْرُو بْنُ بَرَّاقٍ 'Amr b. Barrāq と al-Shanfarā (いずれ ṣu'lūk 特に後者は詩人として有名) という彼の友人二名と組んで、メッカ南方の 'Asīr という山岳地帯に住む Bajīla 族を襲い、いったんは捕らえられたが、気転を利かせ、走力を用いて、無事に逃げたかを誇らしげに自賛したものである。彼の詩の4行目の解説のところに、أَبُو عَمْرٍو الشَّيْبَانِي 'Abū 'Amr al-Shaybānī によるこの一件に関する事件が以下のように紹介されている。

タアッバタ・シャッラン、アッシャーンファラー、アムル・ブヌ・バッラクの三名は、バジーラ族を襲撃した。三名はバジーラ族があらかじめ襲撃の企てを知って伏兵を置いているのに気づいた。彼らは、夜中に伏兵に近付くと、タアッバタ・シャッランが他の二人に“水辺に待ち伏せしているぞ。人々の心臓の鼓動が聞こえる。”と告げた。けれども、仲間は“誓って言うが、俺たちには何も聞こえない。鼓動しているのは貴様の心臓であろう。”と言った。そこでタアッバタ・シャッランは自分の胸に手を当てて、“アッラーに誓って、俺の心臓は、どきどきなぞしていないぞ。”と言い返した。仲間は“とにかく水辺に行って水を飲まねばならぬ。”と言って、まず、アッシャーンファラーが出かけていった。ところが伏兵らは、彼がアッシャーンファラーだと知ると、捨て置いたので、彼は水を飲んで仲間のところへ引き返してきて、“アッラーに誓って、水場には誰もいなかった。俺は水溜りの水を飲んできたのだが。”と言った。しかしタアッバタ・シャッランは“いやいや、伏兵はいるのだ。ただ彼らが狙っているのは君ではない。俺なのだ。”と言った。ついで、イブン・バッラクが出かけて行って、水を飲んだが、彼らは手を出さなかった。そうして“水辺には誰もいなかったぞ。”と言った。タアッバタ・シャッランは“いや、きっといるのだ。だがやつらが捕まえたいのは君ではなく、この俺なんだ。”と言った。さらに彼はアッシャーンファラーに“俺が腰をかがめて水を飲もうとするときを狙って、きっとやつらは飛び出してきて俺を捕まえて縛り上げるだろう。そうなれば、君はさっさと逃げておいて、あの山の麓まで引き返して待機してくれ。そうして、俺が、＜捕らえ、捕らえ＞と、叫ぶのが聞こえたら、俺のところに来て、いましめを解いてくれ。”と頼んだ。また、イブン・バッラクには、“俺はあんたにやつらに捕まってくれ、と声を掛けるから、やつらとあまり離れず、しかし、捕まらないよ

うにしてくれ。”と言いつけた。

(このような打ち合わせをしたうえで) タアッバタ・シャッランは水場へと出かけた。彼が水溜りに腰をかがめると、バジーラ族の伏兵が飛び掛り、捕まえて後ろ手に縛り上げた。そこで、アッシャンファラーは飛ぶようにして逃げ、ひそかに打ち合わせた場所に引き返して待機した。イブン・バッラークのほうは、伏兵から見えるところまで離れた。そこでタアッバタ・シャッランは、“バジーラの皆さん、皆さんが少々得をなさる話なのですが、身代金の件で私を少しばかり楽にさせて下さらぬか。つまり、イブン・バッラークをも捕らえられるように計らってもよいのですが、如何でしょう。”と持ちかけた。かれらは“よし、そうしてくれ。”と言いつけた。これを聞くと、タアッバタ・シャッランは、“災いなるかな、イブン・バッラークよ、アッシャンファラーは飛んで逃げ、今頃は某部族の火に当たって体を温めていることだろう。君は俺たちと君の一家との関係をよくわきまえているだろう。ここで、俺の身代金を少し楽なものにするために、捕まってくれないか。”と声をかけた。これを聞くと、イブン・バッラークは、“アッラーに誓って、一走りか二走りしてからのことだ。”と答え、山の方へすばやく走り、ついで引き返してきた。バジーラの男たちはイブン・バッラークがだんだん疲れてきたのを見て、もはや捕まえられと思うて追いかけ始めた。タアッバタ・シャッランは、“今だ、やつを捕まえよ”と叫んだ。すると、バジーラの伏兵らは全力で彼のあとを追った。イブン・バッラークは疲れた振りをして彼らを誘い、遠くへとひきつけた。その間にアッシャンファラーが背後からタアッバタ・シャッランのところに現れ、いましめを切り離した。これを見て、イブン・バッラークはタアッバタ・シャッランのところに駆けていった。タアッバタ・シャッランは立って、“バジーラの衆よ、イブン・バッラークの走力に驚かれたか。こんどは、アッラーに誓って、彼の走力を忘れさせるように俺の走りをお目にかけよう。”とやってアッシャンファラーと逃げ去った。

قَالَ تَأَبَّطْ شَرًّا⁴⁾

١- يَا عَيْدُ مَا لَكَ مِنْ شَوْقِي وَإِزَاقِي وَمَرَّ طَيْفِي عَلَى الْأَهْوَالِ طَرَّاقِي

4) この詩は変わったナシーブ(愛の序詩)で始まっている。すなわち、彼女の幻が訪れると言うものであるが、これは短く、彼の並外れの走力が、バジーラ族から逃れるのに発揮された自慢話につながっている。ついで選ぶべき友人に言及し、どうやらアッシャンファラーらしい人物に触れている。10 - 14行では理想的なスウルーク像を描いている。15行はアッシャンファラーのことと思われる。16 - 19行は偵察のために高い山に登ったときの、彼の健脚を自慢したものであろう。20 - 26行では彼があまりにも気前良く、ために財産を失い、略奪を余儀なくされているのを非難する者への反論である。basīṭ 調, 26行。

- ٢- يَسْرِي عَلَى الْأَيْنِ وَالْحَيَاتِ مُحْتَفِيًا
 ٣- إِنِّي إِذَا خُلَّةٌ صُنْتُ بِنَائِلِهَا
 ٤- نَجَوْتُ مِنْهَا نَجَائِي مِنْ بَحِيلَةٍ إِذْ
 ٥- لَيْلَةً صَاحُوا وَأَغْرَوْا بِي سِرَاعَهُمْ
 ٦- كَأَنَّمَا حَثَّحْتُوْا حُصًّا قَوَادِمُهُ
 ٧- لَا شَيْءَ أَسْرَعَ مِنِّي لَيْسَ ذَا عَذْرِ
 ٨- حَتَّى نَجَوْتُ وَلَمَّا يَنْزِعُوا سَلْبِي
 ٩- وَلَا أَقُولُ إِذَا مَا خُلَّةٌ صَرَمَتْ
 ١٠- لَكِنَّمَا عَوَّلِي إِنْ كُنْتُ ذَا عَوْلِ
 ١١- سَبَّاقِ غَايَاتِ مَجْدٍ فِي عَشِيرَتِهِ
 ١٢- عَارِي الظَّنَابِيْبِ مُمْتَدِّ نَوَاشِرُهُ
 ١٣- حَمَالِ الْوَيْةِ شَهَادِ أَنْدِيَةِ
 ١٤- وَذَاكَ هَمِّي وَعَزْوِي أَسْتَعِيْثُ بِهِ
 ١٥- كَالْحَقْفِ حَدَّاهُ النَّامُونَ قُلْتُ لَهُ
 ١٦- وَقُلَّةِ كَسِنَانِ الرُّمَحِ بَارِزَةٍ
 ١٧- بَادَرْتُ قُنَّتَهَا صَحْبِي وَمَا كَسَلُوا
 ١٨- لَا شَيْءَ فِي رَيْدِهَا إِلَّا نَعَامَتُهَا
 ١٩- بِشَرُشَةٍ خَلَقِي يُوقِي الْبَنَانُ بِهَا
 ٢٠- بَلْ مَنْ لِعَذَالَةٍ خَذَالَةٍ أَشْبِ
 ٢١- يَقُولُ أَهْلَكْتَ مَالًا لَوْ قَنَعْتَ بِهِ
 ٢٢- عَادِلَتِي إِنْ بَعْضَ اللَّوْمِ مَعْنَفَةٌ
 ٢٣- إِنِّي زَعِيمٌ لِّئِنْ لَمْ تَتْرَكُوا عَذْلِي
 ٢٤- أَنْ يَسْأَلَ الْقَوْمُ عَنِّي أَهْلَ مَعْرِفَةٍ
- نَفْسِي فِدَاؤُكَ مِنْ سَارٍ عَلَى سَاقٍ
 وَأَمْسَكْتُ بِضَعِيفِ الْوَصْلِ أَخَذَاقٍ
 أَلْقَيْتُ لَيْلَةً خَبَتِ الرَّهْطُ أَرْوَاقِي
 بِالْعَيْكَتَيْنِ لَدَى مَعْدَى ابْنِ بَرَّاقٍ
 أَوْ أُمَّ خِشْفٍ بِذِي شَتٍّ وَطُبَّاقٍ
 وَذَا جَنَاحٍ بِجَنْبِ الرِّيدِ خَفَّاقٍ
 بَوَالِهِ مِنْ قَبِيضِ الشَّدِّ غَيْدَاقٍ
 يَا وَبَحْ نَفْسِي مِنْ شَوْقٍ وَإِشْفَاقٍ
 عَلَى بَصِيرٍ بِكَسْبِ الْحَمْدِ سَبَّاقٍ
 مُرْجِعِ الصَّوْتِ هَذَا بَيْنَ أَرْفَاقٍ
 مِدْلَاجِ أَذْهَمَ وَاهِي الْمَاءِ غَسَّاقٍ
 قَوَالٍ مُحْكَمَةٍ جَوَابِ آفَاقٍ
 إِذَا اسْتَعَثْتُ بِضَافِي الرَّأْسِ نَعَّاقٍ
 ذُو ثَلَتَيْنِ وَذُو بَهْمٍ وَأَرْبَاقٍ
 ضَحْيَانَةٍ فِي شُهُورِ الصَّيْفِ مِحْرَاقٍ
 حَتَّى نَمَيْتُ إِلَيْهَا بَعْدَ إِشْرَاقٍ
 مِنْهَا هَزِيمٌ وَمِنْهَا قَائِمٌ بَاقٍ
 شَدَدْتُ فِيهَا سَرِيحًا بَعْدَ إِطْرَاقٍ
 حَرَّقَ بِاللَّوْمِ جِلْدِي أَيَّ تَحْرَاقٍ
 مِنْ تَوْبِ صِدْقٍ وَمِنْ بَرٍّ وَأَعْلَاقٍ
 وَهَلْ مَتَاعٌ وَإِنْ أَبْقَيْتُهُ بَاقٍ
 أَنْ يَسْأَلَ الْحَيُّ عَنِّي أَهْلَ آفَاقٍ
 فَلَا يُخْبِرُهُمْ عَنْ ثَابِتٍ لَاقٍ

٢٥- سَدَّدَ خَيْتَلَاكَ مِنْ مَالٍ تُجْمَعُهُ حَتَّى تُلَاقِيَ الَّذِي كُلُّ امْرِئٍ لَاقٍ
٢٦- لَتَقْرَعَنَّ عَلَيَّ السَّنُّ مِنْ نَدَمٍ إِذَا تَذَكَّرْتَ يَوْمًا بَعْضَ أَخْلَاقِي

- 1- おお、思い出の回帰の時よ、そなたは何故慕情をかきたて、不眠をもたらし、恐ろしい遠隔地で夜中に幻の姿で訪れるのか。
- 2-彼女の幻は夜、疲労も毒蛇も気に留めずに素足で訪れる。できうれば徒歩⁵⁾で夜旅をしてくるそなたの身代わりになってやりたいものよ。
- 3-恋する女性が私の願う愛情を惜しむようになり、擦り切れた弱い絆で私をつなぎ止めようとするならば、
- 4-私はバジーラ族から逃れたときのように彼女からすばやく去る⁶⁾。即ち、アッラフトの軟弱な地を全速力で夜間走り去ったように。
- 5-その夜、彼らは叫び、駿足の男たちを私にけしかけた。それは、イブン・バッラクが駆けたアルアイカターンの地であった。
- 6-まるで彼らは前羽が抜けたガチョウ⁷⁾か、シャッスやトッパークが生えている所にいる母ガゼルをせきたてているようだった。
- 7-私よりすばやいものは、一切ない。たてがみ豊かな馬も、山頂の上を羽ばたくワシとて、私には及ばない⁸⁾。
- 8-かくして、私は（バジーラ族の追っ手から）なにも分捕られないうちに無事逃れた。気が狂ったように有り余る走力で去ったのである。
- 9-親しい友との絆が切れたときに、なおその友にあこがれて“ああ、不幸なるわが魂よ”などと、私は断じて言わぬ⁹⁾。
- 10-しかしながら、私がもし誰かのために泣くとすれば、それは賞賛に値する行為を、よく洞察した上で、率先して取り掛かる者に対してである。
- 11-彼は輝かしい目的を目指して一族の先頭を駆け、(略奪戦で)仲間らに大声を上げて、繰り返し指揮する。
- 12-向こう脛を露にし、発達した頑強な腕に血管を浮き上がらせ、土砂降りの真つ暗な夜、突進していく¹⁰⁾。
- 13-彼は旗手¹¹⁾であり、部族会議に臨む決定的意見者であり、遠隔地への冒険者で

5) 注釈者(الأنباري al-Anbārī アルアンバーリー)によると、幻は足で歩かない。すなわち、日本の幽霊のように足がないらしい。ところが、詩人は足がある者として描いている。

6) ジャーヒリーア詩においては、女性の愛情がさめたと知ると、男は彼女からさっさと去っていくのが男らしさと述べている例が他にもみられる。たとえば、لابيد ラビードのムアッラカ 20 - 21、および55 - 56行。

7) 前羽が抜けたガチョウは成鳥となっていて、最高の走力を持つ。母カモシカは好物の植物を食べて活発に動く。タアッバタ・シャッランらを追うバジーラ族の男たちの走力も相当なものであることをしめすことにより、逃げる彼らの速さを一層際立たせている。

8) 本文の *laysa* を *illā* の意味にとると、“たてがみ豊かな馬と嶺の上を羽ばたくワシとは別だが”となる。しかし、タアッバタ・シャッランにまつわる逸話には彼が馬より速く駆けた、というものがあるので例外表現として訳さなかった。

9) 彼の強固な精神を誇ったもの。

10) 「敵が油断しているときを狙って襲撃する」の意味。

11) 旗手とは勇敢さを表し、首領であることをものがたっている、テントで穏やかにしているタイプの男ではない、と言っているようなもの。

ある。

- 14-そのような人物こそ私には必要であり、救いを求める。援助を求めるのは乱髪でカラスのようなしわがれ声¹²⁾を出す男だ。
- 15-彼の乱髪は登ってくる者達によって踏み固められた砂丘の背のようだ。私は彼を“羊二群の持ち主¹³⁾、子羊と縛り綱の持ち主”と呼んでいる。
- 16-槍の穂先のように高く聳える幾多の嶺に、燃えるような夏の太陽にさらされながら。
- 17-私は仲間たちを抜いて、登って行った。彼らは決してのろまではなかった。私は日が昇ったあと、山頂にたどりついた。
- 18-山上にあるものといえば、(日差しを避けるための) テントの残骸のみで、倒れた支柱や立ち残ったものが散在していた。
- 19-私はぼろのサンダルに別のサンダルを重ね、皮ひもで束ね、足の指先をかばいながら登ったのである。
- 20-一体、誰が議論ずき¹⁴⁾で混乱させる罵り手から私を守ってくれるだろうか。彼の非難は私の肌を焼き尽くす。
- 21-彼は“お前は財産をつぶした。お金を惜しみ、高価な着物や見事な武器やその他の貴重品を手放さなければよかったのに”¹⁵⁾と言う。
- 22-私をそしめる者よ、そなたの非難はいささか冷酷だ。財産は惜しめば残るものだろうか。(時世が財産を持ち去るか、私をあの世におくるだろう。)
- 23-私は自分の言葉に責任を持つ。もしもお前たちが私を非難して止まないのであれば、それでよい。(お前たちとはおさらばだ) きっと部族の者達は地の果てまで人々に私の行方を尋ねるだろう。(だが誰も私の消息をあかさない)
- 24-きっと人々は事情通に私のことを尋ねるであろうが、サービト(詩人本人をさす)に出会った者すら何も知らせないだろう。
- 25-お前が集めたお金でお前の貧困の割れ目を塞ぐがよい。誰もが出会う死に直面するために。¹⁶⁾
- 26-(ともに幸福に過ごした) 私の人柄を何時の日か思い出すとき、後悔して歯軋りして嘆く。

12) 乱髪は若くて元気、復讐する相手を倒すまでは髪に手を入れないなどを示す。カラスのような声とは、略奪したラクダ等を追い立てるのに役立つ声のことで、同時にカラスの用心深さにかけたものか。

13) “羊二群の持ち主、仔羊と縛り綱の持ち主”とはおそらく、略奪行をともにするアッシャンプアラーのあだ名と思われる。アッシャンプアラーはムファッダリヤートの20番目にあげられているが、その詩の19行でタアッパタ・シャッランのことを أمّ عيال umm 'iyāl (主婦) というあだ名でよんでいる。

14) 本文 khadhdhāla (見捨てるもの)、では意味の通りが良くないので、別の伝承により、 جَدَّالَة jaddāla (議論ずき) で訳した。

15) お前は金に困りやむなく金欲しさに、略奪してまわらねばならぬ、といったもの。

16) この二行の脚韻には同じ lāqi と言う単語が使われているが、これはアラブ古詩では避けられるのが一般的である。また、前の行からの意味の展開から見ても、26行と25行が誤って入れ替わったものと、考えられる。